

# ジェイコブズの教訓：強いアマチュアと専門家の共闘とは

(別冊『環』22「ジェイン・ジェイコブズの世界 1916-2006」 2016, 藤原書店 所収)

山形浩生

## はじめに

ジェイン・ジェイコブズの概要とそのすごさ、意義については、『アメリカ大都市の死と生』の訳者解説で書いたとおりだ。これについては、ネット上で参考文献や細部に関する注まで補った完全版を無料公開してある<sup>1</sup>ので、興味ある向きはお読みいただきたい——というか、本誌のこの特集を読んでいる方がそもそも興味ないわけではないので、ジェイコブズとその業績に関する基礎情報として本誌に手を出す前に熟読は必須だろう。書いたのは2010年だが、6年たった今でもおそらく、ジェイコブズに関する紹介と評価としては内外問わず、最も包括的で詳細でフェアなものの一つだからだ。

それを決してジェイコブズの専門家でもなければ関連分野の研究者でもないぼくが書かねばならなかったというのは、少なくともジェイコブズの関連領域についての研究者がかなりいることを考えればかなり情けないことだ。そしてこれはそれ自体が、本稿でぼくが扱おうとするテーマについて、何事かを物語るものではある。そのテーマとは、専門家とアマチュアの関係だ。

## 専門家の惨状？

いまでも書いた通り、ぼくはジェイコブズの専門家などではない。一応、大学では都市計画を専攻したこともあり、彼女がだれかは知っているし、その主要な本は一通り読んでいた。でもその業績をまともに位置づけたり、歴史的な背景を分析したり、などということには無縁だ。その意味で、ぼくはアマチュアではある。そしてアマチュアとして、そうした作業は、当然きちんとした専門家のだれかがすでにやっているものだと思ったし、『アメリカ大都市の死と生』全訳を終えてあの解説を書くにあたっては、そうした既存の研究を見つけ出して紹介すればすむだろうとたかをくくっていた。

でもふたを開けてみると、ジェイコブズやその関連分野について専門家であるはずの人たちが書いたジェイコブズ関連文献のほとんどは、特に国内ではきわめてレベルの低いものばかりだった。欧米でも、まとまった文献の多くはジェイコブズの信者が書いた偏りの多いものだった。それ以外の多くの論説も、ジェイコブズの主張のごく一部、たとえば自動車反対とか住民運動とかを表層的にとらえて、それが自分の関心分野と多少関係があること

---

<sup>1</sup> <http://cruel.org/books/deathlife/deathlifetransnotefull.pdf>

に無邪気に喜んでみせるだけの代物だ。多くはジェイコブズがどういう状況で何と戦おうとしたのかについて——特に 1960 年代の欧米におけるインナーシティ問題について——まったく理解できていない。彼女の活動をいまの状況に安易にあてはめて、ことたれりとしている。たとえば雑誌『地域開発』vol.503 (2006.8) のジェイコブズ追悼特集のほぼすべてのエッセイは、この範疇に入る。

また、ジェイコブズに対する批判的な視点というのも皆無。ジェイコブズだって神様じゃない。外れもあるだろう。ジェイコブズ的な「多様性」評価に問題はないのか？特に彼女の経済学的な論考には、鋭いところもあるがはずれも多い。これは、口の悪い大経済学者ロバート・ソローだけでなく、ジェイコブズの心酔者である都市経済学の俊英エドワード・グレイザーですら批判する通り。

そして彼女の敵とされる、ニューヨーク市の公共事業担当者ロバート・モーゼスだって、まったくの無知無能な悪の権化の利権屋なのか？ そんなはずはない。もちろん、モーゼスのすべてのプロジェクトが成功ではない。が、当時のニューヨークでかれがやろうとしていたことは何なのだろう。それは全体として見たとき、完全に否定されるべきものなのか？ついでに、モーゼスのキャリアの中でジェイコブズはそんなに大きな存在だったのか（どうもちがうようで、ジェイコブズとその支持者の独り相撲の面も大きいようだ）。ジェイコブズを評価するというのは、そうした点も含めて検討することだと思う。

ところが、そうした作業をやってくれている論説はきわめて限られたものだった。そして『アメリカ大都市の死と生』新訳の後に出了たジェイコブズの研究書である、宮崎洋司&玉川英則『都市の本質とゆくえ: J.ジェイコブズと考える』は、なぜかぼくが訳者解説の中で触れた批判論「だけ」を採り上げて、弁明してみせる。それもほとんどまともな弁明になっていない。彼女の業績を評価する、というのは彼女の言うことを盲目的に弁護することではないはずなんだが。そして、一応彼女に関する専門家として本を書くのであれば、ほかの批判もきちんと紹介して、応える（というのは別に弁明することではない）べきだと思うんだが。

『アメリカ大都市』の解説で、ぼくは多少なりともそれをやろうとした——というのも、ほかにやっている人が見当たらなかったからだ。自分の偏見なり支持イデオロギーなりを出発点に、形式的に似たようなことをジェイコブズが言っている——それだけでジェイコブズをまつりあげ、錦の御旗として使っておしまいというのは、情けないほど安易であるだけでなく、ジェイコブズを愚弄するものだと思う。ジェイコブズ自身、そういう御神輿扱いを嫌い、各種の名誉職の肩書きをことごとく拒否してきた。そして、ぼくが挙げたもの以外にも、ジェイコブズへの批判は出ている。それを多少なりとも受け止めて、本当に見るべきものは何なのかを整理する、それをやってこそその専門家だろう。あるいは他人の批判をチェックしなくてもいいから、自分の活動分野に照らしてジェイコブズのどこを評価すべきなのかについて何らかの示唆を導き出すべきじゃないのか？ぼくはアマチュアとしてそう思う。

その意味で、ぼくは本書の特集がどうなるか、かなり興味を持っている——どちらかといえば悪い意味で。これまで、多くの「識者」（必ずしも日本だけではないが）は、ジェイコブズにあまり正当な評価をしてこなかった（繰り返すけれど、正当な評価というのは、別に褒めそやすという意味ではない）。それが近年、少しでも変わっているだろうか？そこはお手並み拝見ではある。本書では、ジェイコブズを都市計画、地域計画、住民運動、経済学などの各種視点から各種論者が語るはずであり、単にジェイコブズを話の枕として使うだけのものにはなっていないと期待したい。つまり、専門家が専門家としての仕事をきちんとこなしてくれることを期待したい。頼みますよ。

が、それが期待通りだったとして、一つ課題がある。それで十分なのか、ということだ。

## 専門家の限界とアマチュアの可能性：ジェイコブズの業績

もちろん、そうした各種の視点は重要だろう。それはそれでやってほしいし、そこから面白い成果も出てくるかもしれない。ただ、それではジェイコブズの真価をとりこぼしてしまうのでは、とも思う。あの解説でもぼくはこう書いた。「個別の立場から、建築やら産業やら治安やら金融やらの専門家による論集を作ることはできる。だが、本書が扱っていた問題は、そうした個別領域よりも、その総合的な絡み合いの中にあり、したがって論集では決してとらえきれない」。そしてジェイコブズのすごさと意義はまさに、そういう専門家的な分野ごとの分析を乗り越えたところにあった。

『アメリカ大都市の死と生』が扱った都市の問題は、社会学、金融、経済学、フィジカルプラン、コミュニティデザイン、経済、行政、みんな関係してくる。そしてそれぞれが相互に影響するところに、問題の難しさがある。フィジカルプランの問題を引き起こしたのは、税制と金融政策だったりする。経済の問題は、フィジカルプランが引き起こしたものかもしれない。一つの分野だけ掘り下げても、その問題は見えてこないし、また適切な処方箋もかけない。

そして、現代においてはそうした問題がますます重要性を増しつつある。

これは、一つには世の中がますます複雑になってきたから、と言いたくもなるが、そうではないかもしれない。各種部門の専門家がそれぞれの分野で活躍してくれた成果でもある。世界の複雑さは昔も今も大差ないけれど、明確に定義できるそれぞれの領域内で閉じた問題は、往々にしてかなり解決を見た（あるいはそもそも解決しようがない）。すると相対的に、これまではそうした単純な問題の陰に隠れていた、多分野にまたがる因果関係を持つ出来事の比重が大きくなってきた。世の中は複雑になったわけではなく、単に複雑な問題しか残っていなくなった、ということなのかもしれない。

そして百年単位で見れば、人々の寿命は延び、健康になり、生活水準は上がっている。世の中はよくなっている。大きな問題は解決され、その残っている問題も実はあまり大きな問題ではないのかもしれない。

たとえばジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』だって、そもそも人々の住むところがないとか、上下水道を整備する必要があるとか、そうした人々を支える物流を整備しろという生死にかかわる問題に比べれば、あまりたいしたことを問題にしていない、ともいえる。町の賑わいがどうした、単調さをなくした多様性のある犯罪のない町作りを、住民参加的に行うにはどうしたらいいか——それは専門家が解決してきた本当に大きな都市問題に比べれば、ローカルでマイナーで中流階級のぜいたくでしかないという見方もできる。分野縦割りの専門家的な観点からすれば、それが正当な見方になるだろう。そしてそれが十分に正当性を持つ見方だ、というのも念頭に置く必要がある。

でもジェイコブズがえらかったのは、地元でのローカルな運動と同時に、それらの問題が実は決してローカルでもマイナーでもなく、あらゆるところの都市や経済の根本に関わる普遍的な問題を含んでいるのだということを指摘し、まがりなりにも理論化したからだ。都市は、各種の活動のための物理的なスペースがあればすむものではなく、そうした活動同士が有機的に組み合わせたり、創発的に成長するような環境を作るものでなくてはならない。ジェイコブズが理想化したグリニッジビレッジの状況は、中流階級のぜいたくかもしれない。でも別にそういう形でなくてもいい。そうした活動の有機的な組み合わせが何らかの形で存在しなくては、いくら箱だけ整備しても、それは都市にはならないのだ。

当たり前のことではある。でもそれまでの都市計画は、第二次大戦後のインフラ整備や防災、自動車普及に対応した構造変化と急増する人口への対応に追われていた。活動の組み合わせを許容する都市環境づくりは、多くの関係者は無意識のうちにやってはいたし、また人間も別に都市計画家にすべてお膳立てしてもらわずとも、自分で勝手に活動を作り出そうとする。でもそれに改めて光を当てたのは、ジェイコブズの功績ではあった。そして、それまで箱さえ用意すれば人々が勝手に相互作用してくれていた状況で、専門家の一部は、そうした活動の組み合わせが無意識的に考慮されてきたことを忘れ、そうしたものを考える必要がないかのような錯覚に陥った。特に、建設技術と交通技術の発達で、そうした箱やインフラがこれまでとまったくちがうスケールで作れるようになったときに、その錯覚が大きな問題として浮上した。ジェイコブズは、まさにそのときに、その錯覚をついた。

これは、ジェイコブズのアマチュアとしての優位性だった。そしてそれは、アプローチの差でもある。専門家はまず自分の領域から始める。そしてそこでは片付かない問題に出会ったら、それを広げてハイブリッド領域、または「学際」領域を作ってアプローチしようとする。

でも、世の中の組み合わせは無数に考えられる。どんな学際領域が有効かも、見極めるには一苦労だ。そこに強い方法論があれば、シカゴ派経済学が社会問題から夫婦関係やら子供の名前にまで合理性分析を適用したような成果もあり得る。でもそうでなければ、学際研究は往々にして、群盲象をなでるだけの状態からなかなか抜け出せなくなる。

それに対して、ジェイコブズはアマチュアとして全体から入り、既存分野の区切りなどおこまいなしに自分の見つけた問題をバシバシ切り出し、ついでにそれに気がつけない

専門家たちを罵倒して回った。

ちなみに、経済についてもまったく同じことが言える。資本と労働があれば生産活動が生じ、見えざる手で市場が動くというのが古典的な経済学の見方だった。それを実際に可能にするにはそうしたものを積んでおくだけではダメで、人的資本（つまりは教育）もいるし、制度も必要だし、金融も重要だし、地理的配置も重要だし、それに伴う収穫逡増も多様性も重要だし等々。ジェイコブズは、80年代以降の著作でそれを直感的に理解し、自分なりの見方を構築していった——やはり経済学者たちを罵倒しながら。実は、その経済学者たちもすでにそうした見方を理論化しつつあったところだったし、それに比べるとジェイコブズのアプローチは雑だった。それでも、そのアマチュア的なアプローチと洞察の価値が否定されるわけではない。

## アマチュアと専門家の共闘関係

ある意味で、ジェイコブズがそういう才能を発揮できたのは、時代的なタイミングの面も大きい。いま述べた通り、経済学はすでにジェイコブズが重視したような課題に取り組みはじめていた。だからこそ、ジェイコブの主張もそれなりに市民権を得た。都市計画についても、『アメリカ大都市』解説で説明したとおり、あの本が出た頃にはすでにブルドーザー型スラムクリアランスは下火になりつつあり、またジェイコブズが参考にしたグリユエン報告をはじめ、すでに彼女の主張の大枠を先取りする視点も出始めていた。

それでも、そのタイミングで彼女の着目点が先駆的であったのも確かだ。そしてまさに、そのタイミング故に、彼女のアマチュア的なアプローチは多少なりとも専門家の支援を受けられた。都市計画がちょうど変わり始めていたが故に、彼女のアイデアを新世代の専門家が活用し、自分たちの分野の変化へとつなげた。あるいは経済学でも、新世代の経済学者たちが自分たちのアイデアの有用性を示すために彼女の洞察を参照した。ついでに、そうした各分野の新世代の台頭にあたって、ジェイコブズのかなりお下劣な罵倒は旧世代否定の援軍としても機能している。

専門分野での問題の解消と、それに伴う視野狭窄化、そこから引き起こされる新たな学際問題の台頭、それに対応したアマチュアの総合的視点と洞察の有効性、そしてそれを利用した専門家による専門分野の刷新と発展——ジェイコブズは、こうしたサイクルに大きく貢献したが故に、いまなお大きな評価を得ている。そしてもちろん、これを単なる評論家や理論家としてではなく（彼女は大学にも行っていない）、市井の活動家としての活動の中から、肩書きのみならずその行動面でも筋金入りのアマチュアとして実践したことも大きな評価ポイントとなる。

## 強いアマチュア育成とは：原発事故と小林よしのり

おそらく、今後ジェイコブズ的な強いアマチュアが活躍できる／すべき場面は増えるはずだ。というのも各種の学際的な領域をまたがる問題は、相対的にせよ絶対的にせよ、ますます重要になってくるからだ。そして、専門家がそうした問題になかなか対応できない状況は当分変わりそうにない。それが絶対的に大きな問題となったのは、たぶん東北震災に伴う原発事故の後処理だった。

原発事故が起きたときの専門家の多くの対応は、それはそれはひどいものだった。この点は、いまさら繰り返す必要もあるまい。政府や関係機関の責任者たちは情報隠しに終始し、何らまともな見通しも対応も出せなかった。それどころかある学会は、学会員たちに対して原発事故とその影響をめぐる発言をしないようにと釘を刺すお触れをまわしたほどだ。純粹に技術的な問題だと思っていた原子力発電が、なにやらずっと変な政治と利権と組織力学の絡んだ、「学際的」な問題になりはてていることを、ぼくたちは思い知らされた。

そしてそれにより高まった不安につけこんで、イデオロギー的な意図を持ったエセ専門家たち（いやエセではないはずの人も）が人々の不安をさらにあおり、東北も関東も日本もすでに放射能の焦土だ、逃げろ脱出しろ何も食うな、それを否定するやつらはみんな原発村の手先と不安をさらにあおり、特に半可通のアマチュアたちをはじめ多くの人々はその尻馬に乗った。それをいさめようとした一部の良心的な専門家たちの多くは、なにやらツイッターやブログのコメント欄であれこれ言われたくらいで萎縮し、黙ってしまった。日本は同調圧力が強いからと、それを擁護する人もいる。でも同調圧力に屈することこそが、まさに同調圧力を延命させ、それを強化する。ぼくはその意味で、そうした弱い良心的な専門家たちも、問題の一部だったと思う。

結局のところ、まともな対応をしてくれたのは、必ずしもこうした問題の専門家ではない物理学者たち、たとえば早野龍五や田崎清明や菊池誠などではあった。こうした人々は、ある意味でジェイコブズ的な、強く優れたアマチュア（本人の中心的な専攻分野とはちがうところでの活動だという意味で）と言えるかもしれない。早野龍五は、大学関係者からの「早野を黙らせろ」という圧力を受けつつも、最も有益な情報を流し続け、それに救われた人は（ぼくも含め）数知れない。

あるいは、多くの読者は顔をしかめるだろうけれど、葉害エイズ問題における小林よしのりは、まさにそうした強く優れた——そして運動論も持った——ジェイコブズ的なアマチュアだった。いまの小林をどう評価するかはまた別問題だ。でも当時のかれが、完全な門外漢にもかかわらず、非常に有益な活動を繰り広げ、状況をかなり変えたことは否定できない。そしてそうしたジェイコブズ的な強いアマチュアの出番は、今後ますます増えるはずなのだ。

ただしこれは別に、アマチュアは常にすばらしく偉大だとか、素人が常にタコツボ専門家を蹴倒す、という安易な話ではない。つーか、だれでも知っているように、たいがいの声のでかいアマチュアは無知で不勉強で一知半解の浅知恵居士でしかない。経済学者ポール・クルーグマンは、「いまの経済学はまちがっている！」という素人の勇ましい文章の大半は、

その「いまの経済学」なるものをつゆほどもご存じないトンデモだと嘆いている。これはあらゆる分野について言えることだ。インターネットの普及で、専門家が否定されてアマチュアの天下がやってくるような妄想は一時はやった。ネットの集合知が、あるいは最近ではビッグデータ解析や人工知能が専門家に取って代われるだろうというわけだ。が、ネットが自然にそのような英知をひり出してくれるような都合のいい状況はまだ起きていない。

その一方で、そのクルーグマンは、自分の研究作法についての文章<sup>2</sup>の中で、素人——少なくとも分野外の人——の重要性を強調している。かれは経済学の多くの分野で、かなり画期的とされる理論的なブレークスルーを実現している。そしてそのためのコツを、次の三つのステップとして表現している。

1. 異教徒に聞いてみよう
2. 問題そのものを見直せ
3. あえて馬鹿になろう

「異教徒に聞いてみよう」は「たとえ自分と慣習が違っていたり、分析的な話し方をしない相手でも、知的な人の言うことに耳を傾けよう」、という意味だとのこと。クルーグマンの専門である貿易理論や経済地理学では、経済学者以外の人々はその後の発展につながるデータを十分集めていたし、また経済学的な定式ではなくても、そのヒントになる知見を持っていたという。

そして、次の二つは、その専門分野での問題の枠組み自体を見直し、まったくちがったことをやってみよう、ということだ。これは当然、「異教徒」（つまりはその分野の素人）の知見をどう活かすかという話になる。その分野の常識を、外部の知見を取り入れるかたちで見直す——そこに素人の貢献があり得る。

これを見ると——そして常識的に考えても——アマチュアの活躍に必要な条件がいくつかわかってくる。

まずは、アマチュアであっても役に立つにはそれなりの勉強が必要だということだ。しばしばネット見かけるアマチュア（いや、一般には知見があると思われている評論家ですら）は、百年前にケリのついたトンデモな主張を蒸し返し、それを指摘されると自分はアマチュアなんだから勉強の必要はない、そんなことをあげつらうこと自体が悪意のいやがらせだ、専門家がオレに優しく教えろと平気でふんぞりかえる。もちろん過度の勉強は逆に、その分野の既存ドグマに取り込まれる結果となり、アマチュアの意義そのものが消えてしまう可能性はある。それは、そのアマチュアの度量次第ではある。それでも、自分が思いつく程度のことではだれかがすでに考えているのでは、という意識は必要だ。

おそらく、アマチュアがまず活躍できる場面は、きちんと観察する、記録する、という役割だ。さっき、東北震災の原発事故に伴う早野龍五らの活動を挙げた。そこでまず行われたのは、とにかくデータを整理し、コンピュータで処理できるようにすることだったし、その

---

<sup>2</sup> ポール・クルーグマン『ぼくの研究作法』（“How I Work,” *The American Economist*, 1993）邦訳 <http://cruel.org/krugman/howiworkj.html>

後は実際に給食の放射線データを計測したりなどといった、観察と記録とその公開の分野だった。これはハードルの低い分野だ。データ収集のお作法は、多くの分野でそんなにちがうものではないし、また科学的なお作法に則ったデータ収集ではなくても、だれも記録しようと思わなかったものをぐちゃっとした整理されない形で観察して記録することには、それだけで意義がある。ジェイコブズが『アメリカ大都市』で記述している「歩道のバレー」は、まさにそうした整理されない記録だ。

ときどき、こういう話を見て、アマチュアをデータ収集などの現場の下働きにこき使えるのでは、という変な期待を抱く人がいるけれど、そんなムシのいい話はない。ただ、そうした思惑とは別に、アマチュアが自分の関心に沿って有益な貢献をするケースはたくさん考えられる。

そしてその次の段階として、カンの鋭いアマチュアであれば、自分の（いや場合によっては他人の）データから出てくる漠然としたまとまりを、ある程度は概念化できるはずだ。ジェイコブズはそれができた。そしてその見方は、すでに述べたように既存の分野をほぼ無視するものとなっていた。クルーグマンの指摘する「問題そのものを見直せ」「あえて馬鹿になれ」が彼女は——そして多くの有益なアマチュアは——できる。というのも、アマチュアのアマチュアたるゆえんは、見直すべき問題をそもそもあまりよく知らないところにあるからだ。むしろ、「馬鹿になれ」と努力する必要もなく、そもそもその分野における「賢い」見方をあまり知らない——これはさっき述べた通り、弱みにもなり得る（たぶんそのほうが多いかもしれない）。でも、特にジェイコブズのように、それが自分なりの観察と組み合わせあって裏付けられた場合には、大きな利点となり得る。

観察力、そしてすでに片付いた問題に足をとらわれないだけの勉強と、ドグマにはまらないだけの不勉強とのバランス、あるいはほかの分野での知見をそこに持ち込める総合性——アマチュアが優位性を発揮できるのは、そんな条件がそろったときなのだろう。これは、かなり危ういバランスを必要とする。とっくに片づいた俗論を大発見のつもりで振りかざしている無知なだけのアマチュアと、本当に専門分野のドグマを突破できる着想を持っている、無知かもしれないが有益なアマチュアとを、どう見分けるのか？

そしてこの両者は、必ずしも別ものではないかもしれない。たとえば、薬害エイズ問題や、その後の差別論では非常によい仕事をしたその後の小林よしのりがたどった道は、強い優れたアマチュアの陥りかねない落とし穴を示すものでもある。専門家に刃向かえるだけの強さを持ったアマチュアは、変な陰謀論やイデオロギーにとらわれたときに、他人の意見をきかないアマチュアでもある。それをどういう形でいさめるべきか？

ぼくはそれは、専門家のほうに期待するしかないと思っている。ぼくはさっき、ジェイコブズが活躍できたのは、専門家のタコツボ化の一方でそれを変えようという動きが専門家の中でも出てきていたからだ、と述べた。だから、ジェイコブズは自分の活動に対して、外部の支援を受けられた。ジェイコブズが漠然とした形で指摘したことを拾い上げて、評価し、自分の専門家としての仕事の中にとりこむ人がいた——それがジェイコブズの評価につながる



がった。つまり平たく言えばジェイコブズは、その慧眼をちゃんと褒めてもらえた。

ちなみに、電磁気学で有名なファラデーは、学問なんて貴族のお遊びだった時代に貧乏人一家から出て、デーヴィー卿の実験助手にしてもらって、各種実験の中での観察とデータを元に、漠然と電磁気学の基礎になる理屈を思いついた。でも、あまり数学ができなかったのも、その論文は評価されなかった。あるときマックスウェルがそれに注目し、その意義を見いだしてきちんと定式化したことで、ファラデーの名声はいちやく高まった（ファラデーをアマチュアと呼んでいいかは、議論がわかれるとは思うが）。そうした成果につながったアマチュアの業績は、評価される。そうでなければ日の目を見ない。もちろん当人の存命中は日の目を見ない学問的な業績は多い——アマチュアにせよ、専門家にせよ。でも、やはりアマチュアの場合、その成果が専門分野に拾われるかどうか、そのアマチュア自体の活躍にとって大きな差をもたらす。

その意味で、有益なアマチュアと、自分の分野の変化を目指す（できれば新世代の）専門家の共闘関係のようなものが、おそらくは重要なだとぼくは思っている。アマチュアは、大枠は出せる。何か新しい見方や動きの先鞭はつけられる。でも、それを精緻化して発展させるのは、専門家の仕事だろう。

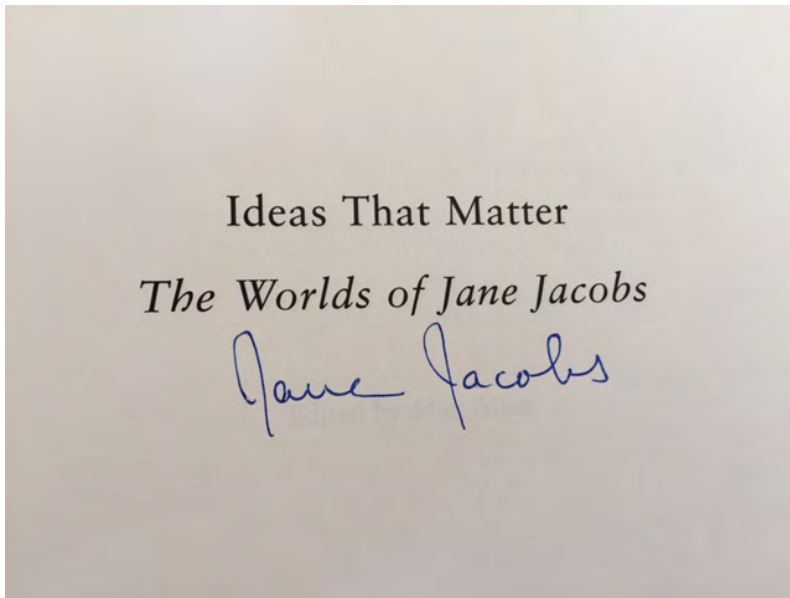
その意味で、ぼくは小林よしのりはかわいそうだったと思っている。かれは本当に頑張ったし、運動の先鞭もつけたし、エイズ問題以外でも様々な論点について、自分なりのかなりしっかりした考え方も出していた。そして、いったんその運動が盛り上がり政治的な成果もあがりはじめたところで、まさにここに書いた通りのことを主張した。あとはもう専門家がやればいい。アマチュアはもう日常に帰れ、と。でもそれが、一部の人の思惑に反するがために、手のひらを返したようなバッシングにさらされ——そしてかれはだんだんちがう方向に進んでいった。もっと様々な専門家がフォローして褒めてあげれば——。

するとある意味で、有益な強いアマチュアを育てるには、柔軟で強い専門家を育てることが重要ということになる。そしておそらく——クルーグマンが言うように——柔軟で強い専門家は、その分野の外の有益で強いアマチュアの成果に恩恵を受ける。この両者の共闘関係と適切な相互作用をいかにして作り出すかが課題となる。

個人的に言えば、1990年代のインターネットで大きく栄えた、掲示板文化が大きなヒントとなるはずだ。特に、東北大学の数学者黒木玄の運営する掲示板は、多くの学者が学者らしいマニアックな雑談を展開しつつ、このぼくを含め多くのアマチュアも口をはさみ、ときにバカと嘲笑され、ときに褒められる希少な場を作り出した。一方で、その学者たちも自分の専門外ではアマチュアとして、やはりその分野の専門家にいじられる——そうした場の存在が重要なのだろう。おそらく、ジェイコブズの場合には建築雑誌でのジャーナリストとしての経験と、実際の住民運動での経験がそうした場を提供していたはずだ。

本誌の読者層は、おそらくは半分くらいが学者、半分くらいが意識の高い市井のアマチュア知識人だろうとぼくは踏んでいる。その人々がどのようにジェイコブズ的な強いアマチュアとなり、そしてそれと共闘する強い専門家になれるか——あるいは、そうなる人を育て

られるか——というのが、今後の日本や世界にとっても大きな課題ではある。それを可能にするための場をいかにしてつくりあげるかは、社会の課題であるとともに、読者のみなさん（そしてこのぼく）の課題でもあるのだ。そして、本誌のような雑誌も、そうした場として機能するのが理想であるはずだ。というわけで最後にその応援の意味もこめて、ジェイン・ジェイコブズのサインを。



これは、晩年に出たジェイコブズの雑文集だ。一人でも多くの方が、この本の題名のよう  
に、本当に社会にとって意味のある考えを展開し、実践できますように。